

論文の内容の要旨

Les constructions avec NP(XP) en français

(フランス語の avec NP (XP) 構文)

酒井 智宏

この論文では、これまでほとんど取り上げられることのなかったフランス語の avec NP XP 構文について、記述・理論の両面から論じる。

第 1 章では、第 2 章以降の議論の準備として Ruwet (1982) と McCawley (1983) の分類に適切な修正を加えて整理し、この構文に大きく分けて 3 つのタイプがあり、そのそれぞれが主節主語によるコントロールの有無により二つに下位区分できることを明らかにする。タイプ 1 (Ruwet 1982 にならって avec NP S 構文と呼ぶ) では NP と XP との間に主述関係が成り立っている(例: Avec la France éliminée dès la première phase de l'épreuve, le Mondial ne m'intéresse plus.)。XP の位置には名詞句、形容詞句、助動詞 être を要求する完了分詞、受動分詞、擬似関係節、前置詞句が現れうる。タイプ 2 (avec NP PP 構文と呼ぶ) では XP の位置に pour / comme / en guise de を主辞(tête, head)とする PP が生起する(例: Avec Pierre pour guide, nous avons visité Florence.)。この構文においては NP と PP との間に主述関係は成立せず、主述関係はむしろ NP と PP が直接支配する N' との間に成立する。タイプ 3 (avec NP PP[loc] と呼ぶ) では avec は場所を表す PP を任意に補語に取る(例: Avec ce sacré temps, je ne mettrai pas les pieds dehors.)。PP が明示的に現れるとき、avec NP PP[loc] はしばしば avec NP S としても解釈でき、両者の区別は曖昧にな

る。この区別は第 5 章で問題にするが、それまでは積極的に avec NP S として解釈する。

第 2 章では、avec NP S 構文の構成素構造が[avec [NP XP]]と[avec NP XP]の両方でありうることを示す。

McCawley (1983)は avec NP XP における NP XP が関係代名詞の先行詞になり、かつ等位接続や右端節点繰り上げの対象となるという事実などから[avec [NP XP]]という構造を主張しているが、これらの事実はいずれも決定的な証拠とはならない。しかし、NP XP が擬似分裂文の焦点になれるという事実、および avec NP XP において avec を省略できる場合があるという事実から、[avec [NP XP]]が不可能であると考えer ことには無理がある。

Ruwet (1982)は[avec NP XP]という構造を主張し、その根拠として avec が sans と異なり文補語を下位範疇化しないという事実および擬似関係節の先行詞が接辞代名詞化できるという事実を挙げている。このうち第一の事実は正当性の疑わしい変形を前提としたものであるため支持できないが、第二の事実はフランス語に非局所的接辞代名詞化すなわち接辞代名詞繰り上げが存在しないと Miller & Sag (1997)の議論を踏まえると[avec NP XP]という構造に対する強力な証拠となる。また、avoir NP XP において NP が接辞代名詞化できるという事実からも、この構造に対する間接的な支持が得られる。

以上から、二つの構造をともに認める必要があることになるが、この事実を HPSG(主辞駆動句構造)理論により定式化する。それによると、avec NP S が二つの構造を持ちうることは、avec が語彙的に課す制約と一般的制約との相互作用から必然的に帰結される。

第 3 章では avec NP PP に関して、構成素構造が McCawley (1983)が主張する[avec [NP PP]]ではなく、Ruwet (1982)が(根拠を示すことなく)仮定している[avec NP PP]であること、および PP がいかなる意味においても述語ではなく、NP を PP の(意味上の)主語とする McCawley (1983)分析が支持できないことを示す。

McCawley (1983)は関係代名詞、等位構造および副詞に関する事実から[avec [NP PP]]という構造を主張しているが、これらの議論はすべて無効である。それだけでなく、[avec NP PP]という構造のみが可能であることを示す証拠がある。これには、NP と PP の語順に関する事実、avec NP PP と avec NP S との等位接続の不可能性に関する事実、avoir NP PP 構文に関する事実、avec の省略不可能性に関する事実などがある。

McCawley (1983)は前置詞 as がコピュラ be を置換することによって得られ、フランス語においても同様であると考えている。しかし、前置詞とコピュラとの選択制限の違い、avoir NP PP との関係、avec と sans との違い、NP と PP の語順などを考慮すると、前置

詞がいかなる意味においてもコピュラとは見なせないことが明らかとなる。

その一方で、NP PP が数量詞や否定のスコープドメインとなる、副詞を取り込むことができる、関係代名詞の先行詞になることができる、NP と PP の直接支配する N が文法的一致を示す、などの事実から NP PP が節としての性質を持つことは明らかで、理論的にこれを保証する必要がある。そこで、HPSG 理論を用いて avec NP PP に現れる語の語彙情報を充実させることにより、問題の事実を理論化する。

第 4 章は avec NP S において XP として生起する擬似関係節と現在分詞節の統語特性を詳細に分析することにより、第 2 章で提示した avec の語彙記載を精緻化することを目的とする。先行研究において先行詞+擬似関係節の統語構造として、NP、CP、NP XP の 3 つが提案されているが、これらは NP XP が構成素をなす場合となさない場合とがあるという事実を説明できない。この他、擬似関係節が CP である場合と VP 付加部である場合とがあり、前者は単一判断、後者は二重判断に対応するという分析も提案されているが、この分析は単一判断の場合も NP の接辞代名詞化が可能であるという事実を説明できない。これに対し、本論文第 2 章で示した擬似関係詞を VP のマーカーとする分析は、これらの難点をすべて克服でき、どの先行研究よりも観察的妥当性の点で勝っている。

しかしこの分析は Kayne (1974-75) が古典的変形文法の枠組みで行った qui の統一的分析を取り込むことができない。そこで、観察妥当性を損なうことなく、qui を補文標識として再定式化する。補文標識 qui は主語が空所である VP を補語とし、かつその主語と同一指標を持つ NP を自らの主語として要求する。この語彙記述に加え、Sag (1997) の構文文法的アプローチの知見などを取り入れることにより、qui の統一的分析が可能になる。

この分析を応用すると、現在分詞節が叙述的な擬似関係節であることが示され、そこから J'entends {pleuvoir / *qui pleut / *pleuvant} のような虚辞主語に関する不定詞節と擬似関係節・現在分詞節との対比が理論的帰結として自動的に導出できる。

以上の分析には GPSG(一般化句構造文法)理論や初期の HPSG 理論(Pollard & Sag 1994)において存在が否定されていた主語空所の概念が不可欠である。主語空所の必要性は先行研究において英語の寄生空所現象、チャモ口語の取り出し現象などに関してすでに指摘されているが、本論文はフランス語の事実に基づいて主語空所の存在を論証するものであり、Bouma et al. (2001) で提示された HPSG 理論の再編成に重要な裏づけを与える。

第 5 章では、第 1 章と第 2 章で avec NP S とした構文のうちの一部を問題にし、それらが実は第 1 章で述べた avec NP PP[loc]であることを示す。

一般に avec NP S において NP と XP の語順を変換することはできないが、XP の位置に場所を表す PP が生じるときに限り語順変換が許されるという例外がある。

XP が場所の PP であるときに限り avec の位置に sans が生起できるが、このとき sans が NP に意味役割を与えることは明らかである。よって補語語順変換が許される場合の avec は NP に意味役割を与えており、avec NP S における avec とは異なることになる。

また、問題の付加部と身体名詞構文(*Il est entré avec un livre sous le bras.*)との間には、補語語順変換および sans の生起が可能であるという共通点が観察されるが、身体名詞構文の PP は照応詞であり(Guéron 1983, Koenig 1999b)、叙述的な範疇ではない。したがって、補語語順変換が可能な avec 構文における PP は叙述的ではなく、場所の補語である。

以上の議論から、補語語順変換が可能な avec 構文は avec NP PP[loc]であると結論でき、avec NP S に対しては補語語順変換が許されないという一般化が維持できる。

場所の補語である PP は avec を修飾する付加部ではなく、avec NP における NP の位置を表す意味役割を担う項であると考えられるべき証拠がある。つまりこの PP は、随意的要素でありながら、ひとたび統語構造に現れると、avec NP の表す事態に対して付加的情報を与えるのではなく、avec NP の表す事態にとって本質的な場所の意味役割を供給する。この複雑な状況を定式化するには、Wechsler (1995)によって提案された事態(psoa)の階層に基づく意味役割理論が適しており、この枠組みを用いた定式化を提示する。これによると、avec NP PP[loc]において avec と PP[loc]は単一の事態に関する部分情報をもたらす。このような定式化は制約に基づく文法理論を用いて初めて可能となるもので、avec NP PP[loc]に対してもこの枠組みによる分析が有効であると結論できる。